

〈人・場所・物語〉—”Intangible”なもので継承する江戸東京のアイデンティティ

Site_B 水辺の営み・都市の記憶と物語 出品一覧

I 〈江戸〉概念の広域化

I-1 江戸名所の絵 大奉書1枚
鍬形蕙齋画 刊年不記載 (江戸)須原屋伊八 刊
隅田川東岸、向島上空あたりに視点を定め、江戸市中を見下ろし、はるか西に富士を望む鳥瞰図。1803(享和3)年の初版初印には本図では削除された彫工「野代柳湖」の名がある。表題は別本に付属する販売時の袋(上包み紙)による。絵師蕙齋自身、のちに肉筆で「江戸一目図屏風」(津山市郷土博物館蔵)を描き、さらに無款あるいは別の絵師の手によって同種の図様がくり返し出版された人気作の嚆矢。同じ体裁の日本列島鳥瞰図「日本名所の絵」の袋には鶴屋喜右衛門・和泉屋市兵衛・須原屋伊八の3書肆名があるといい、こちらもあるいは同様の出版か。

I-2 江戸大絵図 1枚
石川流宣図 1713(正徳3)年 (江戸)万屋清兵衛刊
江戸時代前期の江戸を代表する地図作者による江戸図。東は亀戸、西は内藤新宿、南は品川・目黒、北は田端・駒込・巣鴨あたりまで収めるが、地名・村名よりも大名・旗本の屋敷・領地を明記することに主眼がある。

I-3 東都番町図 大奉書1枚
瀬名貞雄・龍峰依為質編 1755(宝暦5)年
(江戸)美濃屋平七・吉文字屋次郎兵衛 刊
江戸を分割した部分図である切絵図は幕末にさかんに出版されるが、その源流の1つ。江戸の部分図集としてはすでに17世紀に『江戸方角安見図』が出された例はあったが、それよりも一図の収録範囲を拡げ、一覧性を高めている。本図をはじめとする8図が出され、主版元の名から吉文字屋版と通称される。本図や続く「永田町絵図」(1759年刊)など武家地を対象としたものは、屋敷所有者の情報を正確に提供することに努め、屋敷替えを反映した変更が高い頻度でなされたと考えられている[斎藤1981]。法政大学市ヶ谷図書館には、版元の1つが美濃屋から北畑氏(須原屋)に代わった後印の図の所蔵がある(291.3/86:WB)。

I-4 安見御江戸絵図 折本1帖
村子慶編 1769(明和6)年刊 (江戸)志村屋次兵衛刊
前項に次ぐ、早期の切絵図集。序文は1764(宝暦14)年付けだが、同年の奥付をもつ本の所在は知られない。吉文字屋版に較べて精度では劣る面もあるが、現千代田・中央区、および港区・新宿区の江戸城に近い一部を1冊に収めた利便性のためか、その後も寛政、享和、弘化まで摺りを重ねているという[斎藤1981]

I-5 天保御江戸絵図 1枚
高井蘭山図 1843(天保14)年 (江戸)岡田屋嘉七 刊
刊記によれば、1696(元禄9)年に原図が作られ、1822(文政5)年の改訂を経て、その後、それをもとにあらたに版を起した。東は中川、西は内藤宿の先の西新宿、北は大きく曲がった隅田川、南は目黒川を境とする。右下には江戸の年中行事が月日ごとに一覧にされ、第3部でみるように行事もまた都市の特性を示す重要なものと考えられていることがここでも看取される。

I-6 安政改正府郷御江戸大絵図 1枚
高柴三雄撰 1854-60(安政)年間
(江戸)須原屋茂兵衛・蔦屋吉蔵ら8肆 刊
「府外の近村に至る迄書加」えたという本図は、東は荒川東岸の市川や柴又まで、南西は玉川の西まで収める。この広域図に需要があるほどに実態として近郊村落までふくめた都市圏が成立していたことがうかがわれる。右下は日本橋から各「遊覧場所」(行楽地)までの道程表。

I-7 明細改正東京新図 1枚
井上勝五郎編・刊 1887(明治20)年
明治11年に施行された15区、すなわち麹町区、神田区、日本橋区、

京橋区、芝区、麻布区、赤坂区、四谷区、牛込区、小石川区、本郷区、下谷区、浅草区、本所区、深川区部をそれぞれ彩色した地図。同人による同様の図は明治18年、19年のものも存在が確認される。周辺6郡まで収めてはいるが、江戸時代後期の諸図に較べると対象領域は狭くなっている。右下の一覧は各区・郡の町名村名一覧。

1-8[名所絵入] 東京区分全図 附四日めぐり独案内 1枚
平野伝吉編・刊 1882(明治15)年
東京15区を収めた図ながら、左右の本所・深川区の東端および牛込・赤坂区の西端は断ち切れ、収録域は限定的。左下は15区6郡とその町村名一覧。四周の名所案内は寺社や吉原など旧来の名所も含みつつも、橋梁や建築など明治の新名所を紹介する。

I-9 再校江戸砂子 半紙本8冊
菊岡沾涼編 1772(明和9)年 (江戸)須原屋伊八 刊
江戸地誌の集大成となる『江戸名所図会』以前、地理情報を集積した刊行物として広く享受された地誌で、現存伝本も数多い。1732(享保17)年初版以後、続編が出され、それらを統合し増補改訂したのが本書『再校江戸砂子』。巻一に江戸城周辺外濠内、巻二に浅草～千住、巻三に上野・駒込～王子、巻四に四谷～高井戸・世田谷、巻五で芝・麻布・品川方面、巻六で本所・深川～大島を収め、板橋方面は手薄ながらも現二十三区全域を視野に収めている。

I-10 江戸名所図会 大本20冊
斎藤幸雄・幸孝・幸成(月岑)編 長谷川雪旦画 大本20冊
1834(天保5)年前半10冊・1836年後半10冊
(江戸)須原屋茂兵衛・伊八 刊
江戸古町名主の斎藤家三代にわたって編纂された、江戸周辺の広域にわたる地誌。鳥瞰図を駆使して現実感を演出した町絵師長谷川雪旦の挿絵と相まって、江戸後期の都市の実相を伝える資料として広く、長く享受されつづけている。伝本は百を超えるが、本書は初印本の刊行後ほどなくして若干の修正を施して刊行されたとされる後印本。全冊、浅葱色に小松模様型押し原表紙の左肩に「江戸名所図会」と摺られた辛子色の原題簽、角裂(かどざれ)の残る保存状態のいい伝本で、木箱に収められている。

I-11 風俗画報別冊新撰東京名所図会全64編
同 東京近郊名所図会全17巻
1896(明治29)～1911(明治44)年 (東京)東陽堂 刊
明治期を代表する絵入誌『風俗画報』の臨時増刊として編まれた東京の地誌。写真、また山本松谷らその時代の絵師による色刷りの挿絵とともに、『江戸名所図会』挿絵の模刻も活用し、名所をはじめとする各地を江戸時代にさかのぼって紹介する。編集方針は「近代的」で、11編までを東京にあらたに作られた公園に宛て、12～14編を隅田堤、15編を東京総説として以降、64編までを15区ごとに編集する。その後刊行された全17巻は東西南北の近郊の名所を紹介する。

I-12 江戸方角名所杖 初編 中本1冊
又玄齋南可撰・立祥(二代歌川広重)画 幕末頃
(江戸)大和屋喜兵衛 刊
主要な江戸名所を図とかんたんな文章で紹介した書。「杖」は「図会」と掛けて見物の道中の支えとなるという意。他機関蔵本の2編が1866(慶応2)年刊の奥付をもつため、本書の刊行はそれ以前と判明する。

I-13 東京方角名所杖 中本1冊
又玄齋南可撰・立祥(二代歌川広重)画 明治初年頃
(東京)大和屋喜兵衛 刊
前項『江戸方角名所杖』をそのままに「江戸」を「東京」と彫り変え、「八丁堀」「木挽町」の半丁と「正一位稲荷鉄砲洲」「築地門跡」の半丁のあいだに「新嶋原廓」「新取立地」(半丁)「異人居留地」「保亭留(ぼてる)坂」(半丁)の一丁を新たにほんただけの安易な編集。

明治初年の版元にとって、江戸と明治の違いはその程度の説明で事足りると考えられていたことの証左といえる。

I-14 東京名所三十六戯撰 大判錦絵画帖
昇斎一景画 1872(明治5)年 (東京)万屋孫兵衛 刊

II 江戸東京的景観：水と緑と人の姿

II-1 絵本春の和歌葉 半紙本3冊
芍薬亭長根編・喜多川歌麿画 刊年不記載 (江戸)丸屋文右衛門 刊
江戸の風俗名所を題とする狂歌本。歌麿はこの時期、狂歌師の発注による江戸名所絵本を多く手がけていたが、そのなかでも本書は稀覯本。1794(寛政6)年頃刊と推定される西村伝兵衛による初版時の『狂歌よもぎの島』の題簽では大英博物館に唯一の伝本が知られ、再摺にあたる本書の『絵本春の和歌葉』の題も本書のほかにも国立国会図書館の1本が判明しているのみ。さらにのち『絵本若葉栄』と改題された本も伝わる。掲出箇所は、かがり火をともし舟が並ぶ隅田川の白魚漁。しだいに小さくなるように描かれた遠景の舟や森が影絵で表され川面の暗さを暗示する。

II-2 画本狂歌山また山 大本3冊
大原炭方編・北斎画 無刊記
江戸の中でも、牛込や市ヶ谷以西の山の手を舞台とした江戸名所狂歌集。江戸狂歌界を盟主大田南畝とともに牽引した朱楽菅江の有力門人便々館湖鯉鮒こと牛込在住の旗本大久保正武の連中が主導して制作した。初印は1804(享和4=文化元)年(江戸)葛屋重三郎刊。関口龍隠庵(現芭蕉庵)の菅江の狂歌碑と菅江らしき人物が描かれることから菅江の七回忌のために制作されたと考えられている。北斎が壮年期に可憐な美人造型をうち立てた時期の代表的な狂歌絵本の一つ。掲出箇所は神田川が外濠に落ちるところ(現・飯田橋駅東口付近)で、魚をすくう男たちとその脇を、日傘をさして涼しげに通る母と子。

II-3 東遊 大本1冊
浅草市人編・北斎画 1799(寛政11)年
(江戸)葛屋重三郎 刊
この時期に江戸で流行し、多くの人士の参入を見た江戸狂歌の連中の中でも、とりわけさかんに北斎に挿絵を発注した浅草連中による春興(正月用)狂歌集。挿絵は見開き20図、半丁9図あり、のちに挿絵のみ彩色摺りで『画本東都遊』として刊行される。掲出図は墨田川河口の佃付近の白魚漁。船の綱と遙か西に望む富士山が相似形をなすように描かれているところに北斎の造形感覚がうかがわれる。

II-4 江戸名所図会(狂歌本) 半紙本1冊
浅草庵(黒川)春村・千種庵諸持撰・柳川重信画 1837(天保8)年(江戸)千束庵蔵版
『江戸名所図会』の刊行に触発されて、日本橋・両国橋・浅草・隅田川・上野・日暮里の地と四季の題を取りあわせた狂歌集。口絵は彩色摺り。前編のみの伝存だが、本書の他、現存はUCLAパークレー校東アジア図書館蔵本が知られるのみの稀覯本。

II-5 江戸名所 上野不惹池 大判錦絵
初代歌川広重画 1832-34(天保3-5)年
(江戸)佐野屋喜兵衛 刊
広重は数多くの江戸名所シリーズを手がけているが、その出世作であった保永堂版「東海道五十三次之内」と同時期に手がけたのがこの「江戸名所」「東都名所」シリーズ。本図は桜咲く、春の夕暮れの上野の不忍池のほとり、往来する人びとのかたわらにおもちゃ売りが描かれる。

II-6 江戸名所四十八景 中判錦絵張込帖
二代歌川広重画 1860-61(万延元-文久元)年

目録の図には「東京名勝三十六戯撰」。明治の新風俗を交えて、江戸東京の名所を当地における滑稽な一場面によって描く連作37図とその目録を画帖仕立てにする。一景は師系不明の明治初期の歌川派絵師で、作画期は1870~1874年とごく短い。掲出箇所は神田川が隅田川に合流する手前にかかる柳橋の上をゆく傘屋が傘を落としてゆく場面と、その手前の柳原(現、浅草橋付近)の舟上で女性が転んで放屁した場面(ほか)。

(江戸)葛屋吉蔵 刊
江戸各地の定番的名所を、基本的にほぼ俯瞰構図で描いた中判錦絵四十八枚のシリーズ。化学染料の輸入がはじまった幕末の絵らしく、紫や赤、鮮やかな緑を印象的に使用している。

II-7 東京詞 1帖
大沼枕山詞 春木南溟・奥原晴湖・滝和亭ら画 津田信全編・蔵版 1869(明治2)年 刊
幕末・明治を代表する漢詩人大沼枕山が急激に変貌する東京に対する風刺的なまなざしを向け詠んだ「東京詞」30首に、当時、活躍した南画系の絵師による風景画や人物画を取り合わせた画帖。洋風建築や病院、病院 日本橋を馬車で行く人々など新風俗も描かれる。掲出箇所は、坂田鷗客による九段坂と牛ヶ淵。背景に招魂社(現・靖国神社)がのぞく。

II-8 東都花容月影譜 1冊
三木貞一著 尾形月耕画 1887(明治20)年
(東京)九春堂 刊
副題は「東京めいしよ図譜」。東京の四季折々の名所、行事や祭礼を日本語・漢文・英語の3言語で紹介し、明治前半、日清戦争以前の国際感覚のありようがうかがわれる。掲出箇所は、花見の季節の上野から不忍池を臨む場面。

II-9 東京開化狂画名所 横中判錦絵画帖
月岡芳年画 1881(明治14)年 (東京)綱島亀吉 刊
横小判20図の画帖。東京の各地を舞台に、人々の失敗、化物・妖怪や動物との格闘を新時代の風俗とともに描く。掲出箇所は舟遊びで花火に見とれて着物がめくられて覗かれているのに気づかない芸者と洲崎の潮干狩りで巨大な赤貝に手をはさまれて大慌ての人々。

II-10 東京史蹟写真帖 1冊
戸川残花編 1914(大正3)年 (東京)画報社 刊
戸川による巻頭の緒言によれば、明治44年の貴族院による「史蹟及天然記念物保存に関する建議案理由書」と史蹟名勝天然記念物保存協会の希望と趣旨を同じくするという。巻頭に近世初期の古地図を掲げ、史蹟の写真だけでなく由緒にも少なからぬ紙幅を割き、巻末に「東京名勝鏡」と題する番付を附録とするなど、江戸を歴史ある都市として顕彰しようという色彩が濃い。

II-11 東京名所写真百景 4枚
1897(明治30)年 (東京)藤井内蔵太郎 刊
4枚に各25枚の写真を収める。江戸時代以来の名所と近代の新名所が交錯する。一枚めでは、皇居前の楠木正成銅像や九段坂上靖国神社の大村益次郎像がある一方、深川不動や亀戸天神、目黒不動などの寺社が交じる。隅田川の橋でも新大橋、両国橋は木造、吾妻橋は鉄橋であるのもこの時代ならではといえよう。

II-12 東京写真帖 1帖
1907(明治40)年 大橋光吉編・刊
無刊記ながら、中野武管の序文によれば、実業家大橋光吉が東京勸業博覧会開催を記念して刊行したという。区ごとに343図を収め、田山花袋による69ページに及ぶ東京案内が付載される。掲出箇所には明治の新吉原とともに船の行き交う隅田川、またそこで水泳する人々の姿がみえる。

Ⅲ 変貌を超え、歴史を貫く記憶とアイデンティティの継承

Ⅲ-1 新編江戸志 半紙本 10 冊

近藤義休原撰・義傳編 1775(安永 4)年頃成 写本
『江戸砂子』以後、同書の補綴を志した書物の一つ。旗本父子による原著に、江戸の地理を探究しことで知られた旗本で武家故実家であった瀬名貞雄・大久保忠寄らが本書記述の精度を高めるべく加筆した江戸の詳細な地誌。写本ながらも広く読まれて伝本も多く、大田南畝や曲亭馬琴によって読み継がれるなど大きな影響力をもった。掲出箇所は大久保による増補箇所、18 世紀後半に隅田川河口に築かれたものわずか十数年で撤去された短命の盛り場中洲新地の記録。

Ⅲ-2 燕石雑志 半紙本 7 冊(巻 4 重複)

曲亭馬琴著 1811(文化 8)年(江戸)和泉屋平吉・(大坂)河内屋太助ら 5 肆 刊

当時、知識人のあいだで、前時代の事物について文献などによって探求した考証随筆の執筆が流行した。読本『南総里見八犬伝』で知られる馬琴による本書もその一つで、多岐にわたる物事を多数の書物を用いて論述する。とりわけ巻三には「わがをる町」として、俎橋をはじめとして馬琴の居住した飯田町付近の地名の由来などについて詳述されている。正岡子規文庫蔵本。

Ⅲ-3A 八十翁嚙昔話 大本 1 冊

財津種蕪著 1837(天保 8)年 尚友堂蔵版 (江戸)紙屋徳八刊

享保期に 80 歳台であった老翁が幼少期以来の江戸風俗を語ったものとして広く読みつがれた記録のうちに刊行されるに至った書物。『むかしむかし物語』などといったさまざまな書名で数十に及ぶ多くの写本があり、多くに新見老人、新見正朝の名が付されていることからその談と考えられてきたが、昭和の書誌学者森銃三によって著者を財津種蕪とすべきことが指摘された[同著作集 11]。武家の生活風俗その他街の様子などが詳細に記される。これが版本刊行以前から広く読まれたことに、江戸時代前期の生活風俗への関心の高まりがうかがわれる。

Ⅲ-3B 異本昔ばなし 半紙本 1 冊

3A の刊本以前に広く流布した写本の 1 本。本書には前項のように森の指摘した通り「財津種蕪翁の齢八十歳にあまりて」書き記したことが明記される。ところどころに異文があり、とりわけ巻末の 6 条および序文はまったく版本にはない記述。

Ⅲ-4 江戸から東京へ 全 8 編 8 冊(4 編欠)

矢田挿雲著 1921-25(大正 10-14)年
(東京)金桜堂書店(～4 編)、東光閣(5 編～) 刊

大正期の江戸懐古趣味のなかで出された数々の書物のなかでも、平成の中公文庫に至るまで、くり返しさまざまな出版社が刊行し続けた、大衆小説作家による大部な東京の史蹟案内。区ごとに多くの史蹟を立項し、それぞれの現況と由緒や伝承を随想風に綴る。

Ⅲ-5 近世江都著聞集 半紙本 1 冊

馬場文耕著 1757(宝暦 7)年序 写本
講釈師として江戸の街の貴賤さまざまな人物などの噂を高座にかけたらしい文耕の数々の著作の一。八百屋お七、白子屋お熊ら芝居の種となって注目を集めた町娘たちや歌舞伎役者や名高い遊女、島流しにあった絵師英一蝶ら、人の耳目を集めた人物について詳述し、世人の好奇心を満たしたであろう著作。

Ⅲ-6 都の手ぶり 半紙本 1 冊

石川雅望著 刊年不記載 (江戸)英文蔵刊
江戸の町の諸相を、国学者としての知識を活かして、平安時代さながらの擬古文で記述した雅文集。初印は 1808(文化 5)年、角丸屋甚助版でその後印本。富沢町の古着市、両国橋の見世物、馬喰町の宿場、茅場町薬師の植木市、夜鷹(最下層の街娼)をとりあげ、江戸だけでなく全国各地から集まる人々の多様さ、光を当てられることのみならず貧困層の人々にまなざしを向けている。

Ⅲ-7 近世奇跡考 半紙本 5 冊

山東京伝著・喜多武清画 刊年・版元未詳
江戸時代初期のさまざまな風俗・習慣の実態を、文献や伝承などに探ったいわゆる考証随筆。100～200 年前のことであることを条件に、初代市川団十郎や伝説の豪商紀伊国屋左衛門を論じるような有名な人物から(掲出箇所)、名もない物売りや些細な事物まで対象は多岐にわたる。初印は 1804(文化元)年、(大坂)河内屋太助・(江戸)大和田安兵衛による出版で、本書は奥付のない後印本。

Ⅲ-8 あづまの手ぶり 大本 1 冊

大西椿年画 1829(文政 12)年 小林新兵衛・大坂屋源兵衛刊

あづま、つまり江戸の都市風俗を描くことを標榜し、街ゆく物売りや諸職人、芸能民の姿を江戸の四条派絵師大西椿年が捉える。多くは背景も捨象され、都市とはそこに生きる人びとであるというメッセージが直截に表現されている。

Ⅲ-9 武江年表 大本全 8 冊・半紙本 2 冊

斎藤月岑著 正編:1850(嘉永 3)年(大坂)河内屋喜兵衛・(江戸)須原屋伊八ら 5 肆刊、続編:1882(明治 15)年 (東京)甫喜山景雄(我自刊我書)

江戸の歴史を編年体で記した書。著者月岑は江戸古町名主斎藤家当主として先々代より引き継いだ事業『江戸名所図会』の刊行を完了した後、江戸各所で行われる一年の行事や四季の景物を概観した『東都歳時記』を上梓。その後、手がけたのが本書で、それら 2 点の広告を付して刊行された。全 8 冊にわたって、年々各月日の天象、事件など、政治などの重要事項に限ることなくさまざまな史実を町に生きる人の目から綴る。月岑は本編刊行後も編纂を続け、これに続く明治 6 年までの巻 9～12 は明治になって活字版で刊行された。

Ⅲ-10 高名聞人東京古蹟誌 一名古墓の露 1 冊

大橋義三著・発行 1898(明治 31)年 刊
地域別に、その地にある著名人の墓とその人物を紹介する。著名人の墓参は「掃墓」「掃苔」として近代にはさかんに行われた。掲出箇所の右は歌舞伎の主人公にもなった幡随長兵衛、左の文章は絵師谷文晁、図は本展でも取りあげている北斎の墓(浅草、誓教寺、その説明文は別ページ)。

Ⅲ-11 文化改正 御江戸大絵図 1 枚

南仙笑楚満人図 1813(文化 10)年刊 (江戸)須原屋市兵衛・善五郎 刊

江戸図に付載するかたちで名所・名産(手工業生産物)・売薬名方(名薬とその薬舗)・名物(食料品とその産地)・名木(花とその名所)を一覧にする。そこに何があるか／入手できるかということが、都市像の一部として地理とともに重視されていたことがいま見える。

Ⅲ-12 絵本東物詣 半紙本 2 冊

歌川豊広画・南仙笑楚満人文 刊年未詳 (江戸)和泉屋市兵衛 刊

江戸の十二月各月を寺社の祭りでたどる絵本。「東」(＝江戸)を題に冠する表象において四季の行事が重要な要素であったことがよくわかる。本作は、本書のような薄墨入りの他に、ギメ美術館蔵本のように彩色摺の本があるが、こちらが初印で、薄墨本は 1804(文化元)年の色摺本禁令の影響を蒙って出されたものと考えられる。

Ⅲ-13 願懸重宝記 中本 1 冊

万寿亭正二著・勝川春亭画 刊年不記載 (江戸)西宮弥兵衛 刊

角書きは「江戸神仏」。江戸の寺社を、病の種類や悩みごとに祈願できる内容とともに紹介する絵入りの案内書。初印は 1814(文化 11)年刊。祈願祈禱という切り口から見た江戸が浮かびあがる。

Ⅲ-14 東都遊覧年中行事 中本 1冊

幽篁庵画 麗斎曙山画 1851(嘉永4)年序 (版元不詳) 刊
巻首・尾題「東都遊覧年中行事」、見返しは「四季遊覧 江戸年中行事」。江戸の年中行事を月日ごとに1冊にまとめ、絵入りで提供した書物。口絵は彩色摺りながら本文の挿絵は墨摺。「江戸」は四季の行事というかたちでも表象された。

Ⅲ-15 御府内八十八ヶ所道知るべ 中本 3冊

二代歌川広重画 1869(明治2)年 (江戸)〈発願主〉大和屋幸助・三河屋利兵衛 刊
四国霊場八十八所に倣って、江戸の弘法大師所縁の寺院を御府内八十八箇所と称した。その1つ、幡ヶ谷不動尊別当莊嚴寺の主導で発願主を立て世話人を募って編まれた各寺院の案内。巡礼の便のため、番号ではなく地域別の編集となっている。奥付は1866(慶應2)年だが、第2冊に明治2年付けの文が摺られていることから後印か。

Ⅲ-16 歌川広重「名所江戸百景」 大判錦絵 2枚

初代歌川広重画 1756-59(安政3-6)年 (江戸)魚屋栄吉 刊
あしかけ4年で118枚および目録1枚、2代広重画落款の1枚が刊行された大判錦絵の揃物。生涯に30を超える江戸名所の揃物を描いた広重の最晩年の大作で、それまでとは異なり、ときに近像に焦点化し視覚的情報量を絞りこんだ図様を含むことから、地方への土産というより視覚体験を絵師・版元と共有する江戸在住者に向け、祭礼や行事も折りまぜて各地の由緒や歴史を感じさせるしなやかな作品とされる[大久保2007]。

A 品川御殿やま 1856年

品川の御殿山は7代将軍吉宗が桜を植えさせて以来の花見の名所として愛されてきたが、1853(嘉永6)年、さらなる外国船の来航に備えて品川周辺の湾岸に砲台、つまりお台場を築造するためにその土が削り取られた。広重は表土をえぐられ変わり果てた御殿山を、以前と変わらず桜を楽しむ人々とともに描出した。

B 五百羅漢さびあ堂 1857年

本所五つ目の五百羅漢寺は人々の信仰を集め、独得の高樓建築三匠堂(栄螺堂)からの眺望が人気であったが、この2年前の安政の大地震で大破した。地震の影響やそこからの復興をときに描きとどめや広重だが[原信田・北原2004]、この景はかつての記憶のままに描き出している。

C 砂村元八まん 1856年

当時の中川河口、砂村にあった元八幡は桜の名所であった。当時は海に近い湿地帯であったこの場所も昭和に埋め立てられた。広重は「名所江戸百景」において『絵本江戸土産』以上に主題を広域に求めているが、その好例。

Ⅲ-17 『絵本江戸土産』初～9編 中本 9冊

初代歌川広重 1850(嘉永3)～1867(慶応3)年(江戸)菊屋幸三郎

百年近く前に西村重長・鈴木春信ら往年の浮世絵師が残した作品と同じ表題で広重が手がけた江戸名所絵本。初摺り本では4編まで題簽の下に東・西・南・北とあり、当初、4冊を東として出す予定であった

▼参考文献

及川茂(2010)「国政四代、国貞三代 香朝樓豊斎——知られざる「明治の江戸っ子」絵師——」『日本思想史』第77号

大久保純一(2007)『広重と浮世絵風景版画』東京大学出版会

斎藤直茂(1986)「江戸切絵図の歴史」「吉文字屋版について」『江戸切絵図集成』第1巻 中央公論社

原信田実・北原系子(2004)「地震の痕跡と『名所江戸百景』の新しい読み方」『人類文化研究のための非文字資料の体系化：年報』神奈川大学 21世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議

森銑三(1974)『森銑三著作集』第11巻 中央公論社

が好評を博したため企画が継続したと考えられている[鈴木1970]。7編には「名所江戸百景 品川御殿やま」と同じく掘削された山肌が見えるように描かれ、2編に描かれたその前ののどかな御殿山の景とは異なる角度から捉えられている。

Ⅲ-18 大江戸繁昌双六 1枚

三代歌川国貞画 1892(明治25)年 (東京)長谷川園吉 刊

明治20年代の旧幕時代回顧の風潮を受けて、江戸城内および将軍家の諸行事のさまを飛び双六に仕立てた作。日光や上野に参詣したり鷹狩りや猪狩りをしたりする将軍、奥の女性たちの様子など、旧幕時代に取材しながらもその時代には描き得なかった場面を描くのが逆説的。絵師三代歌川国貞は襲名後わずか3年ほどのこの年、豊斎と改名している(及川2010)。

Ⅲ-19 残されたる江戸 1冊

柴田流星著 江戸川朝歌画 1911(明治44)年 (東京)洛陽堂 刊

江戸をふり返って、その風俗、習慣、行事、四季折々の行楽、名物を叙述する。とりわけ、夏に軒先に吊す釣葱や朝顔の鉢などは今日にも残るものだが、鉢に蒔いた稗の発芽を水田に見立て、案山子などを配した稗蒔き、あるいは箱庭を楽しむ習慣の数々が特記され、暮らしの中の小さな自然を愛した「江戸っ児」が回顧される。

Ⅲ-20 江戸の珍物 1冊

三田村鳶魚著 1913(大正2)年 (東京)聚精堂 刊
明治初年生まれ江戸研究の泰斗として知られる三田村鳶魚は、その全集が全28巻に及ぶほどに多くの著述を残した。そのうちの1つで、明治の末に語った、江戸の街の諸芸能、伝説の人物や事件、祭礼、制度などについての解説。掲出箇所は、中国から長崎に伝わった通称「唐人踊り」が「かんかん踊」として流行したことについての考証。

Ⅲ-21 江戸むらさき 1冊

笹川臨風著 1918(大正7)年 (東京)実業之日本社 刊
文学者・評論家、また俳人として活動した笹川臨風による江戸文化総論。文化史的な解説に続いて、大尽(富豪)や通人の項目を立てたり、「江戸の女」と題してその風俗や歴代の名妓を論じたりするほか、遊里に多くの紙幅を割き、四季の遊びや行事、料理・名物・名店を記述するなど、学術的というよりは、やはり江戸懐古趣味の横溢する著作。

Ⅲ-22 江戸の夕栄 1冊

鹿島浦船(万兵衛)著 1922(大正11)年 (東京)紅葉堂書房 刊

幕末生まれの著者が江戸の末年から明治初めについての記憶を記した書。江戸を一面的に美化するより、むしろ「犬の糞」「不潔の都府」、はたまた「迷子探し」といった負の面に着目した項目も少なくない。「引廻し叩き放し」「日本橋の曝場」といった犯罪や罪人の扱いについての記述、「乞食芝居」や浅草寺境内の小芝居の項目もあり、大道芸や路上の芸能民下層の娼婦や被差別民にも紙幅を割いている。